

1 条件設定に当たって

学習指導要領では、高学年の音楽科には「中学年までに身に付けた音楽的な能力を基に、能力を確実に高める」ことが求められている。ここで大切なことは、一人一人の子どもが、中学年までに、音楽科のどの領域でどのような音楽的な内容について、どの程度の音楽的な能力を身に付けてきたかということである。また、授業の場面に応じて、その能力を活用できなければならないことから考えれば、個々が身に付けた音楽的な能力を自覚していることが重要となってくる。その際、どのような学習過程を経て身に付けてきたものなのかを理解していることが望ましい。しかし、何よりも本来は目に見えない音や音楽というものに対する能力の高まりについて、分析的に自覚することは難しい。

そこで、養われてきた音楽的な能力をもとに、意識しない表現と意識した表現という比較の視点を持ち、より具体的に幾通りかを表現することによって、音楽を特徴付けている要素（後述）などを再認識することができる。そして、その違いを感じ取って表現することで、その違いを聴き分ける鑑賞の能力も育つであろう。それは、自己内評価で区別して表現できたということではなく、他者の認知によって表現できたととらえれば、かかわる姿がすべての前提になってくる。子どもどうしのかかわりの中で、自らが幾通りかくらべて表現して友達に鑑賞してもらったり、友達の表現や範唱・範奏をくらべて鑑賞したりする活動によって、自己内での比較、友達間での比較、自分と友達との比較が生まれ、表現の技能や鑑賞の能力が相互に高まるととらえた。

これにより、中学年までに身に付けた音楽的な能力が幾度となく活用され、音楽を特徴付けている要素などの何をどのように工夫することで、表現がどのように変化するかを自覚しながら習得することにつながる。さらに、様々な楽曲に出合ったときにでも、自らの基準を持って感じ取ることができるちからの育成につながるととらえた。

これらの「くらべて表現・鑑賞し合うことで育つ音楽のちから」を養うための条件を、以下のように設定した。

- ・条件A 音楽の言葉を正しく理解して表現・鑑賞する
- ・条件B 比較の視点をもって表現・鑑賞する
- ・条件C 相手の表現をいつも好意的に聴く

2 条件について

・条件A 音楽の言葉を正しく理解して表現・鑑賞する

音楽を特徴付けている要素とは、音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なりや和声の響き、音階や調、拍の流れやフレーズなどである。また、反復、問いと答え、変化、音楽の縦と横のつながりなども音楽の仕組みとして学習指導要領の指導事項に記されている。さらに、活動の場面において、わずかな違いでもくらべて表現・鑑賞できるように、歌唱表現では、歌詞（言葉）、イメージ、発音や発声（子音、姿勢、呼吸、息の強さ、ひびき、おなかの支えなど）、リコーダー表現では、タンギングやその強さ、息の強さと、より具体的なものを位置付ける。

これらの音楽を特徴付けている要素など（以下、音楽的視点）について、一人一人の子どもが言葉の持つ意味を正確に理解して、自分の言葉で音楽的視点について話すことができることで、「くらべて表現・鑑賞」する際に、友達と伝え合うことが可能となってくる。

・条件B 比較の視点をもって表現・鑑賞する

養われた表現の技能は、意識的に使い分けるまでに至って、はじめて自分の意思で活用できると言えよう。子どもが様々な楽曲に出合ったときに、音楽的視点をもって鑑賞し、自ら表現の技能の向上を段階的に認知しながら、できるようになったという判断にたどりつく姿である。そこで、とくに小

学校音楽科では、基礎力というべき音楽のちからを習得させる必要があることから、何がどのように習得でき、さらにどのように向上したのかを振り返るとともに、意識的に表現し分けることを取り入れる。

リコーダーの奏法においては、音楽的視点をタンギングの有無だけにして、二通りをくらべて表現・鑑賞するのであれば、表現する子どもの演奏技能や聴き取る子どもの鑑賞の能力に、それほど高いものを求めなくてもよい。しかし、高学年になると、自らの感性を基にタンギングの強弱を工夫した二通りの演奏となれば、表現する子どもには高い音楽表現の技能が、それを聴き取る子どもには感受力や高い鑑賞の能力が求められる。

音楽的視点について、何をどのように意識して表現すると、求められる楽曲の表現がどのように変化するのかを認知させたい。

・条件C 相手の表現をいつも好意的に聴く

さまざまな音楽の表現について感じ取ったものを言葉だけで伝え合うことに、もともと大きな壁がある。聴きくらべる表現が、わずかな違いであればあるほど、言葉では伝え合えないことがあろう。また、わかっているけれどもうまく表現することができないということもあろう。そこで、聴き手は、音楽的視点の何をくらべて表現しようとしているのかを可能な限り理解しようと努める姿勢が重要となってくる。好意的に音や音楽を聴くことで、音楽的な感受や鑑賞の能力がより高まる。違いを見つけてあげようとする立場でかかわり、互いに好意的に聴き合う集団からは、音楽の技能だけではなく、ともに音楽を楽しむ姿が広がることも期待できる。

3 おもな実践

(1) 歌唱表現において（第6学年～合唱練習～）

- ・条件A 音楽の言葉を正しく理解して表現・鑑賞する
- ・条件B 比較の視点をもって表現・鑑賞する
- ・条件C 相手の表現をいつも好意的に聴く

① ねらいについて

子どもは、主旋律（おもにソプラノパート）に大きな興味を示し、アルトパートは人気がない。また、アルトの子どもは、パート練習よりも全体練習を早く行いたいという意識が高い。

そこで、楽曲「心の中にきらめいて」の二部合唱をつくりあげる学習において、旋律を重ねることによる楽曲の魅力を感じ取るためには、それぞれの旋律の表現の工夫が大切だということに気付かせたいとねらい、パートごとに音楽的視点をもとにした単旋律の表現を工夫することに重点を置いた。そして、二つの旋律の重なり合う美しさを味わうためにはそれぞれのパートでの表現の工夫が大切だと気付く姿を目指した。また、二つの旋律が重なることで生まれるハーモニーを体感し、楽曲の持つ魅力をさらに味わわせることで、アルトパートの旋律が、合唱の美しさを味わうために重要であることも自覚させ、アルトパートの子どもには、旋律を重ねてはじめてわかる低声部の魅力を感じ取らせたいと考えた。

そのために、音楽的視点を四つのみとして、視点ごとに個々に振り返る活動を取り入れた。二人組、小グループ、パート、全体と、内容に応じたかかわりの場を設け、互いの表現から良いところを認め合う中で、音楽のちからを高めようと、次の視点で試みた。

- ・音楽の用語を正しく理解して話したり書いたりできるように、表現活動でおもに用いる音楽的視点を「音程」「リズム」「ひびき」「イメージ」の四つとする。
- ・楽譜を中心としたかかわり方ができるように、楽譜と関連付けて表現・鑑賞させる。
- ・視唱の能力を高めるために、楽譜で確認しながら、旋律と音楽的視点の関係を理解させる。
- ・音楽的視点が意味する表現内容を理解できるように、教師がさまざまな表現を範唱する。
- ・音楽的視点を体感できるように、教師の表現につづけて子ども一人一人に順に反復表現させる。
- ・言葉で言い表しにくい表現の違いを音で伝えるために、友達の表現を聴いて模倣し、自ら望ましいと思うものをつづけて表現させる。

- ・ 音楽的視点をもとに教師や友達の表現を聴き比べて、自分がよいと感じる表現を明らかにさせる。
- ・ 友達と自分の表現を比較して、自分の思いを言葉と音で友達に伝えさせる。
- ・ 友達の感じ方を参考にしながら、さまざまに表現を工夫させる。
- ・ どの音楽的視点がどのように表現されているかを把握するために、振り返りシートを用いる。
- ・ 振り返りシートの内容を教師がまとめて提示し、次に楽曲の何をどのように練習すればよいかを確認させる。(全体の意識と個々の意識の差異を感じ取らせる)

② 実践から

パート練習に取り組む子どもの姿は、音楽的視点をどれくらい向上させているかという立場で、積極的にかかわっていた。具体的には、楽譜をもとにして、「この音程がそろっていない」という聴き手の発言から、「今は〇〇(歌って表現)のように歌ったんだけど、□□(歌って表現)のように歌った方が、音程がそろうよ」と、音程の不正確さを指摘する姿へと変容した。そこから、より良いと感じる表現を誰ということなく提示して、みんなで共有する姿へと高まっていった。さらに、上記の四つの音楽的視点について振り返りシート(後述)で記述および評点でまとめて、次時に提示することで、個々のとらえている課題が同様であることに気付き、パート全体で向上させたいものも明らかとなり、練習意欲も高まった。また、アルトパートの子どもの変容は大きく、音楽的視点を向上させることに集中し、また全体練習でも自分たちの旋律の自信を持って音を重ねる姿が見られた。

振り返りシートの自己評点のクラス平均値が、表1である。Bはパート練習を始めた段階(Before)で、Aはパート練習を終えた段階(After)である。これを次時のはじめに提示し、さまざまな分析を行った。例えば、音程が9.0ポイント(最大10ポイント)なのは、どこが不確かなのかを記述をもとに個人と平均を比べながら確認できた。また、イメージのポイントを上げるために話し合いが生まれ、歌詞やフレーズに関連して共通理解がなされた。そして、取り組むべき課題が共有されることで、それを克服しようとする新たな意欲が高まり、本時のパート練習の重点を確認し合うこともできた。

本時の最後にとった振り返りシートでの自己評点が、表2である。音楽科の授業時数の関係で、継続した学習が行われないこともあり、前時に高まった音楽性はパート練習開始時には低下しているものの、本時を終えて前時よりもさらに向上したと自覚する姿がどの音楽的視点でも明らかとなった。1回目の振り返りシートのBよりは、2回目のBの方がいずれも若干ポイントを上げていることから、わずかな向上の積み重ねの重要性を改めて感じ取ることができた。また、音楽的視点を四つにしぼって、その途中経過を提示することで、練習そのものが焦点化されていた。

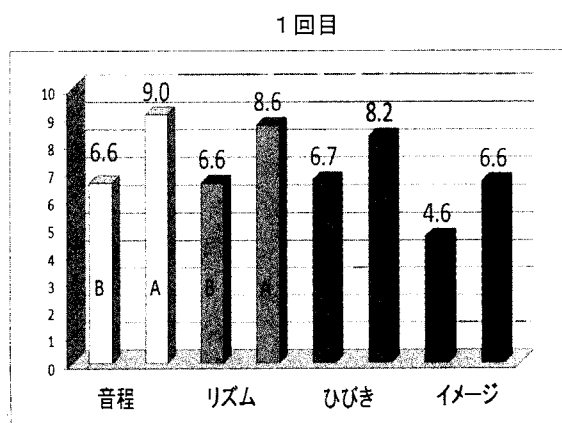


表1 振り返りシートの評点(平均値)

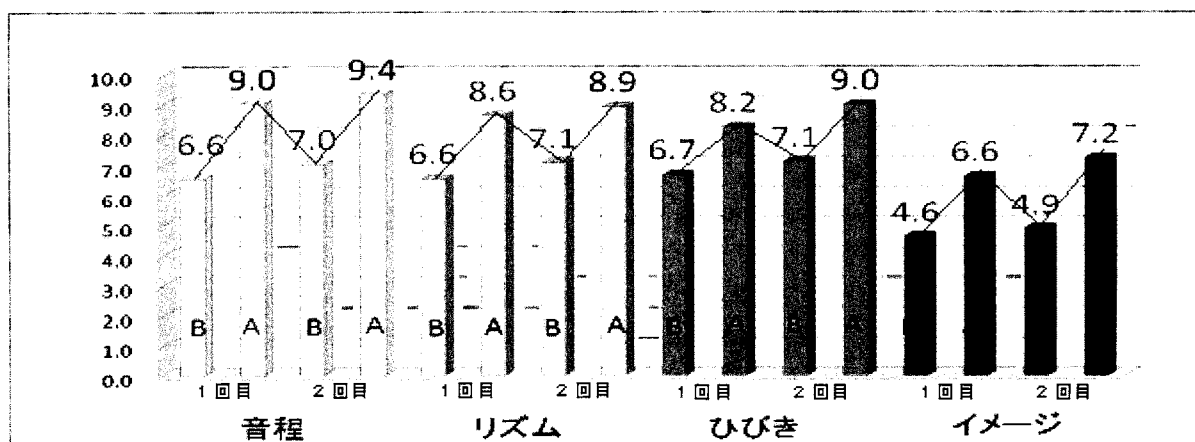


表2 2回分の振り返りシートの評点(平均値)

(2) 器楽表現において（第4学年～リコーダーの個別学習～）

- ・条件B 比較の視点をもって表現・鑑賞する
- ・条件C 相手の表現をいつも好意的に聴く

① ねらいについて

第3学年から授業に導入されているソプラノリコーダーだが、今年4月に会った子どもたちの技能の個人差はかなり大きく、リコーダーでの表現ができることやできないことへの関心が低い現状にあった。そこで、子ども一人一人がリコーダーの音色に興味を示し、教師の範奏や友達の音色を注意深く聴いたり、教えてもらったりするという姿を目指した。

そのために、リコーダーの教則本をもとにして、一人一人がリコーダーという楽器に自主的に向き合い、個々のペースで演奏できる楽曲を増やしていく活動を取り入れた。

② 実践から

子どものリコーダーへの関心は、少しずつ高まりを見せ、友達の演奏できるようになった姿やその教則本に貼られた合格のシールを見て、自分も友達のように吹けるようになりたいと活動に積極的に取り組んでいた。そのために、教師や友達に教えてもらう場面が数多く生まれ、友達どうしのかかわりでは、以下のステップを取り入れていた。

練習中の子ども（以下、吹き手）は、まず自分がどれだけ吹けるようになってきているのかをすでに吹けるようになった子ども（以下、聴き手）に聴いてもらうことから始める。（右写真①）そして、楽譜上のどこをどのように工夫すべきかを、楽譜をもとに互いが明らかにして（右写真②）、聴き手は、吹き手の演奏を模倣したものと、楽譜通りの演奏をくらべて示す（右写真③）というステップである。その後は、吹き手は、その違いを聴き取って、自らの表現を向上させるために同様なやり取りを続けることになる。もちろん、教師や吹ける子どもの範奏をもとに、吹き手が何度も練習を重ねる方法もあるが、より吹き手と聴き手の音楽力がそれぞれ高まることを重視した。

それにより、吹き手と聴き手に以下のようなメリットがあった。

<吹き手（練習中の子ども）>

- ・楽曲内の一部分でも吹けるようになったことを友達に認めてもらうことができ、スモールステップとしての意欲の持続ができた、リコーダーの演奏に対して個々に自信がついた
- ・教則本をもとにかかわるために、音符や休符、音楽の言葉の理解が進み、途中の小節から演奏することもできるようになった
- ・自分がわからないことやできないことがあったら、友達とのかかわりの中で解決しようとする態度が養われた。また、友達との人間関係が良好になってきた

<聴き手（吹ける子ども）>

- ・音を注意深く聴き取ることができるようになった
- ・音楽的視点の何をどうすれば良いかを的確にアドバイスできるようになってきた
- ・合格した時よりも、さらに表現の工夫がみられることが多くなった

4 今後に向けて

教師や友達の表現をくらべて表現し合うことで、音楽的視点を意識して表現する態度が養われ、表現力が向上してきた。また同時に、注意深く聴くことから、鑑賞の能力も高まってきた。また、音楽的視点をもって自ら幾通りかの違う表現を試みる子どもの姿も増えてきた。しかし、まだまだ明らかな違いのある表現の聴き比べとなっていることが多く、少しずつ細かな表現の違いを思いとともに表わせるように努めていきたい。

